

日本国有鉄道波瀬工事局 正会員 石原利夫  
正会員 高木秀典  
武藤京次

はじめに 昭和57年8月2日未明台風10号がもたらした豪雨により富士川は、 $14,200 \text{ t/sec}$  という観測史上未曾有の大出水となって、東海道本線富士川橋りょう下り線第4号橋脚を直撃、70有余年にわたり我が国輸送の大動脈を支えてきた橋脚は局部的洗掘と流勢に耐えきれず、5時、4分頃倒壊、トラス桁2連が流失、続いて下流側の廃線橋脚、同トラス桁(ピニトラス)2連が巻込み水中に没した。お盆輸送の最盛期を目前に手痛い被害となったわけで、一日も早い開通を前提に復旧工事に取くんだ。増水期における異例な河川内工事で、大玉石を含む堅いレキ層と途中二度の台風に見舞われ復旧工事は極めて難航したが、被災から約5日目の8月15日に開通を果たし大動脈は蘇った。

以下悪条件下において架橋技術を遺憾なく發揮し、早期に完成させた設計、施工について述べる。

### 1 復旧計画 8月2日現地に關係技術者が結集し慎重な検討を重ね次の基本的考え方を策定した。

- 1案 流失前と同様の2スパンとし、橋脚1基、 2案 1スパンとし、トラス桁( $125\text{m}$ )1連を新しくトラス桁( $62.4\text{m}$ )2連を製作架設する 設計し、製作架設する。
- 3案 4スパンとし、橋脚3基新設、桁(30m) 4案 廃線の残存桁を転用する。橋脚1基新設する。  
m) 4連を転用架設する。

以上比較検討の結果4案は老朽化甚しく補修に手間がかかること又架設替え困難で不適、3案は適当な桁が見当らないこと、2案は設計製作面及び橋脚2基の補強(アンダーピニギングエ)に長期を要する。結局増水期工事であり、施工中の再度の流失、及び巨大レキ層における工期の不確定要因を極力少なくするところから橋脚は少ないほど得策であるとして1案を採択した。

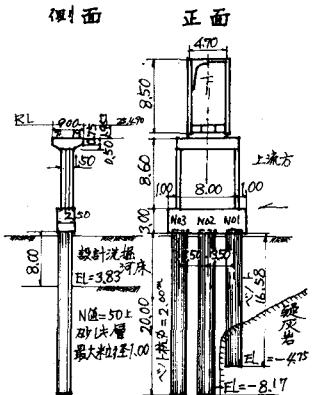
### 2 細部設計 各々の計算は省略して考え方のみ述べる

基礎形式については、ベノト3本、同5本案、ケーン案、鋼管ウェル案について検討をおこなった。結果通常はケーン基礎とするが、増水期施工にはより安全なベノト工法を、そして工期が短かく、不確定要因を減らすため3本案に決定した。又上部工はトラス桁の製作架設は急速施工を踏まえて、下部工と同時施工が可能な設計施工方法を検討し、標準設計を用いることとし製作は可能な限り簡略化を図り、架設方法は強風期には不向きであるが、出水に影響されない工法としてトラベラクレーンによる跳ね出し工法 図-1 新第4号橋脚とした。以下各々の要点を述べる。

#### 2-1 下部工 (図-1)

- (1) 荷重はKS16、水平震度0.2、流速 $2\text{m/s}$ 、鉄筋はSD30
- (2) フイ長さは洗掘深さ8mを考慮、全長20mとし、洗掘深さは根入長とせず突出フイとして解析する。又フイ径は2mとし人力施工可能にする。
- (3) フイコンクリートの硬化まで地下水による侵食を防護するためケーシングは埋め戻しとし、応力を負担させる。
- (4) 橋脚は鉄筋コンクリート造とし、急速施工、動水圧の減等を考慮して柱力スレンダーなものとする。

以上は被災後数日で決定されたことでまだ増水も治まらず、河床状況も明確でなく、設計図の作成や実験準備のため、急ぎれた決定であった。



新設作ト拉斯材は支間 62.4m の標準設計を基本として次のような特殊事項を加味した。

- (1) 風荷重は通常 3.0 sec とするが、台風期施工を踏まえて架橋クレーン載荷状態での風荷重を考慮し下弦材の一部を増強する。
- (2) 急速施工上トルク管理容易な摩擦接合用トルニヤー形高力ボルトとする。
- (3) シューネは変状もなく厚さ 25mm の敷石はそのまま使用するため 高さの違いはシューを特別設計する。以上の検討を加えたが、さらに新橋脚がスレンダーとしたことから地震時ト拉斯材の応答を加味して、架設に使用した連結構を若干改造し耐震連結構に、また新折間にも耐震連結構を考えた。

**3 施工** (1) 流水迂回工 本流の減水をまって被災後1週間後に着手した。迂回位置は上流の河床状況と工事量の最小となる右岸大阪方へ切り廻し、東京方から岸と橋脚までドライにした。流勢の強い箇所は制水ブロックを多めに投入するなど、様返し流水を攻めて約10日間で流れを変えた。

(2) 橋脚工 支柱の打込は予測どおり転石に埋まり振動工法だけでは困難となり高圧ウォータージェットを併用しながら増水も治まらず流勢の強い中で、H鋼道面 6m 延長 60m をノン日間で辿り着いた。

(3) ベノト杭 3本ベントは上流方から N01, N02, N03 の順序とした。着手間隔の 8月 27 日台風、N03 は九州に上陸し富士川は迂回堤天端近くまで増水したが、辛うじて決壊を免れた。もし決壊していたら、すっかり復設工が終っていた直後だけに工事は振り出しに戻り工期を大きく延やすことになったと思われる。

本格的に着手したのは被災後4週間が経過した 8月 28 日であった。MT200 を使用して N01 から掘削にかかった。予測どおり大きな玉石を含む堅いレキ層に阻まれ難航を重ねて深度 8m の位置でケーシングが推進不能となった。潜水夫により調べたところ既に位の巨石が刃口に支障しており、この対策検討待ちを工期に影響させないため、ベノト機械を N03 に移動した。この杭も転石に悩まされはしたがうまく切り抜けたことができた。次いで N02 に着手、転石対策としてロックオーガー、トレパンなどを併用しながら進めた。しかし深度 13m の地点で再び進行不能となり止むなく水を排除し人力掘削に切り替えた。進行は鈍化したがこの箇所はケイ長 2m という広さが施工性を高め、しかも確実で、設計が見事的中したこととなった。N01 に戻り経験をフルに活用して掘削を進めながら、深度 13m の位置で予想もしなかった岩盤に遭遇し進行は極度に低下した。このとき、招かざる台風 8号の接近を知り、河川情報部を頼りに危険寸前まで続行しケーシングに蓋をして退去した。流量約 2千トン/秒に達したとき複数の堤は跡形もなく決壊流失してしまった。しかしクイの被害は少なくセイ直しという最悪の事態は免れ、残工事に適した締切堤を構築、N01 ケーシング内の堆積土砂をジエトにより攪拌しながらポンプで除去し、再び人力で岩を掘り下げ岩高 4m (ケイ長 6.5m) で所要長さとなつたので打ち止めた。このクイの完成により 11月 15日のダイヤ改正の目処がついたのである。

(4) 橋脚コンクリート 橋脚が一部立ち上がりたとき台風 19号の接近を報じられ、万一橋脚が倒れた場合津波出しトラス析の復旧用として、H 形鋼を船体に埋め込み台風に備えた。しかし台風は幸いにも遅れて被災から 5 日目に新橋脚の最終打設をもって下部工は完了した。

(5) 上部工 2連の敷作は、5ヶ月の予定で着手、仮組立簡略のため高精度を要し熟練技術者を集めて非常に短期間で完了し現地に搬入した。架設は下部工への気遣い、上り本線に近接する模倣作業、等悪環境下においてよく架橋技術を駆使して 14 日間で完了した。塗装は軌道工事と競合作業で施工した。

#### 4 あとがき

75日間の復旧工事は 1 日も早い開通を目指す中で、幾多のトラブルに遭遇したが、十分に配慮された設計施工至上、的確な判断、指示が、うまくかみ合ひ最短距離を走ることができ、これを支えていた国鉄本社、構造物設計事務所、鉄道技術研究所、静岡鉄道管理局の皆様方に深く感謝をすると次第です。

月日	8月	9月	10月
工種別	晴	曇	雨
準備	3日	9日	少
基礎工事	成		
橋脚基礎工事	成		
ハーフ橋脚基礎	成		
橋脚基礎施工	成		
ナット取付	2連		
ナット取付	2連		
軌道	150		
電気	成		